審 議 会 等 の 会 議 結 果 報 告 書(公 表)

課所名	教育総務課

会 議 名	第１回 諏訪市ものづくり教育及びキャリア教育推進協議会
開催日時	令和８年９月15日(火)　午後４時30分　から　18時00分まで
出 席 者	(委員)(敬称略) 小林裕子、山崎俊彦、小宮山菜穂、五味武嗣、山嵜晋、松木祐基子、村松浩幸、寺島和雄、徳永理恵、山岸陸途 (事務局) 三輪晋一教育長、小林純子教育次長、森崇教育総務課長、清水友彦教育企画係長、河西瞭主任、溝口純永指導主事 (傍聴者)2名
資　　料	次第 座席表 資料１　諏訪市ものづくり教育及びキャリア教育推進協議会名簿 資料２　諏訪市ものづくり教育及びキャリア教育推進協議会設置要綱 資料３　本推進協議会設置の目的及び「相手意識に立つものづくり科」を取り巻く状況について 資料４　諏訪市ものづくり教育の歩み、「相手意識に立つものづくり科」系統表プロトタイプ、プログラミング学習カリキュラム諏訪市モデルプロトタイプ1、次期学習指導要領の要点(村松委員より提供された) 資料５　諏訪市ものづくり教育奨励基金の基金残高の推移

協議議題(内容)及び会議結果(要旨)

(進行:教育総務課長)

１ 開　会

２ 委嘱状交付

３ 教育長あいさつ

・「相手意識に立つものづくり科」は、25 年以上にわたって取り組まれており、相手意識を大事にする独自の取組として、全国から高い評価を得てきた。しかし、25 年が経過する中で、時代の変化に合わせた新しい教育の在り方や、ものづくり教育を持続可能にしていくための運営体制が課題となっている。

・8 月末に中央教育審議会より審議まとめ(素案)が出され、中学校における「情報・技術科」の新設など大きな改定が見込まれている。本協議会では、「相手意識に立つものづくり科」25 時間の中にどう情報を取り込んでいくのか、など教育課程の在り方や、運営を支えてきた「ものづくり教育奨励基金」の在り方についてご意見をいただき、整理をして論点を明らかにしていきたい。

４ 自己紹介(資料１の名簿順に)

５ 正副会長の選出及び挨拶(資料２の規定に従って)

６ 説明(これより、会長が議事進行)

(１)本協議会設置の目的、及び「相手意識に立つものづくり科」を取り巻く状況について

(事務局)資料３により説明

【質疑応答】なし

６ 協議

⑴ 諏訪市ものづくり教育の歩みと、協議いただきたい内容について

（事務局）資料４により説明

委員より、補足説明

・次期改定の最終目標は、「民主的で持続可能な社会の作り手」の育成である。

・多様な子どもたちを包摂する柔軟な教育課程や探究学習、STEAM教育推進が柱となる。

・一人一台端末の普及を踏まえ、各教科に分散していた情報・ICT要素を集約し、探究活動で実践的に活用できるように整理がすすめられている。

・中学校で「情報技術科」が新設されるが、AIや3Dプリンターなどデジタル技術をツールとして手作業と融合させ、課題解決力を高めるねらいがあるので、足りていないところを調査して概算要求される予定。

・情報技術と実際に手を動かすものづくりの場を融合させることが、次のステージとして非常に重要であるので、「相手意識に立つものづくり科」をSTEAM教育として再構築し、教科と探究の学びを結びつける柱としたい。

（委員）中学校で「情報・技術科」が新設され内容や時数が増える際、教員の指導体制や設備・予算面が追いつくのか不安がある。

（委員）現状でも時数や専門性のやりくりが大変であるが、生徒たちはものづくりを楽しんでいるので、作る体験や手作業の学びは継続させてあげたい。

（委員）自身が小中学生だった頃と比べ ICT 活用が進んでいるが、なぜそうなったのか。また、かつてはなぜ各教科に分散して学んでいたのか。

（委員）以前は、情報教育を集中して学べる環境が整っていなかった。一人一台端末の配付等によって、分散して育成していた情報活用能力を集約して身に付け、深められるよう整理されてきたことが大きい。

⑵ ものづくり教育を推進するための基金について

（事務局）資料５により説明

（委員）将来の地域人材育成に向けた先行投資としての意義があるとするならば、寄付もさせていただきたいと思う。

（副会長）具体的に、いくらくらいの額を考えているのか。 企業側としても、見学等を通じて子どもたちにハードウェアやものづくりの楽しさを伝えることは大事である。寄付を募るにあたっては「年間・

中長期でいくら集めたいのか」という目標金額を明示すると企業も協力しやすい。製造業だけでなく建設業など、幅広い業界に呼び掛けるべきである。

（事務局）年間 400 万～500 万円程度の経費がかかっているが、年によっては利息のみだったり、単発ではあるがまとまった寄付があったりと差がある。持続的な資金集めの仕組みや明確な目標額の設定、対象企業の拡大を検討して、ある程度まとまった形でいただけるようにしたいと考えている。

（委員）自身の子どもも「相手意識に立つものづくり科」を体験しており大変感謝しているが、ここまで費用がかかることを知って、親として驚きがある。同時に、資金がここまで逼迫しているとは知らなかったため、こうなる前に何とかならなかったのかと思う。やってきたこと、やっていることのアピールをもっと行うとともに、どれほど費用がかかり、子どもたちに必要かという点を、保護者や一般市民にも広く認知してもらう必要がある。

（会長）予算（補助）があることで、学校現場ではベンチ作りなど大きなスケールの指導や夢のある活

動を展開できた経験がある。持続可能な基金のあり方を引き続き検討していきたい。

7 そ の 他

（事務局）次回推進協議会の開催について。中央教育審議会の答申の出方を見極めつつ、年内、具体的には 11 月下旬～12 月に、第 2 回を開催したい。

事務局にて今回の各委員からの意見を整理するとともに、次回には、基金の具体的な試算や経費見直し案、協議の論点整理ペーパー、「地域密着型ものづくり講座」協賛企業及び実施日時の一覧を提示する。

8 閉　会（午後 5 時 43 分）